

8. 地域の災害リスクの再確認

自然災害は世界で見ると、20世紀中ごろから増加傾向になっていて、わが国でも後半からさまざまな巨大地震や豪雨といった気象災害が見られるようになりました。その背景には地球温暖化や地球自体が変動期に入ったことがいわれています。加えて、被害は都市部への人口集中による脆弱域への開発や造成といった人工改変、少子高齢化による森林管理の荒廃といったことがあるものと思われます。

わが国は災害列島とも言われていますが、その状況は地域によってさまざまで、地形や地質が多様かつ複雑ということが素因にあると思われます。したがって、効果的な災害対策を講じるには、予想される災害を把握して、地域でどのような状況が展開されるのかを情報として共有する必要があります。その際、地域の地形地質特性に加えて住民の年代構成や土地の歴史など多岐に亘ることを考慮する必要があります。

価値観も多様で、世代が混交している中で災害リスクを同じように捉えることは不可能ですが、災害のベースになるところは同じ意識で共通に理解することが必須です。最も大切なことは、災害に対して脆弱なもの、場所、人といった被害の他に支障となるものの洗い出しをしておいて、それへの対応についてさまざまな知恵や工夫を専門家や行政の力を借りて構想することです。もちろんすべてが完結したものは無理で、他地域での事例や情報などで修正することは極めて大切なことです。そこには関心を持ち続けられる仕組みを考えておかなければなりません。

その中でも特に人命を守るためには、自然災害の発生直前や直後の対応が極めて大事で、地域の防災力が試されるころでもあります。まず災害発生の予感や前ぶれをキャッチした上で、予報や警報情報を的確に入手し、警戒や避難行動に移すことです。これを組織的に行う訓練が出来ていると、人命救助の迅速化、医療活動の着手の効率化、支援物資の輸送、スムーズな配布支援に大きな力を発揮することが出来ます。また、このような取り組みの応用編として、避難所の運営も安全に進めることが出来ると思います。

以上述べたように、避難訓練や講習会を継続することが望ましく、可能な限り参加者を多くして、伝達講習にも期待したいところです。参加できない場合には、スマホの機能を使って発信することや広報誌で内容を共有することも大事なことです。まずは欲張らずに、常に評価しながら前進するというのが大事なことだと思います。身近なところからはじめていくことが継続の秘訣ですが、そのベースになるのが関心を持ち続けることで、地域や学校が一体となって取り組んでいきたいものです。